

研究課題	「キャリア・パスポート」を活用した「学びに向かう力」の涵養
副題	～毎時間の学習の見取りをキャリア形成の見通しへ～
キーワード	キャリア・パスポート、タブレット
学校名	北栄町立北条中学校
所在地	〒689-2111 鳥取県東伯郡北栄町土下100-1
ホームページアドレス	<a href="http://cmsweb2.torikyo.ed.jp/hojo-j/">http://cmsweb2.torikyo.ed.jp/hojo-j/</a>

## 1. 研究の背景

本校が在る鳥取県北栄町は、鳥取県中部の市部近郊に位置し、農業などが盛んな他、全国的に有名なアニメ作家生誕の地として多くの観光客の来訪もあり、市部にお勤めの方々の住宅地にもなっています。

本校は、生徒数210名、学級数10学級（平成30年度）で、これまで、平成28年度に「生徒一人ひとりに課題の発見と解決を促す習得・活用・探求プロセスの構成」、平成29年度に「自ら問いを立て友だちとの協同によりその解決を目指す学習プロセスの構成」（いれもパナソニック教育財団助成申請）を研究課題とし、「自ら課題を立て協同して学習取り組む生徒」の育成を目標に実践に取り組んできました。その中で、生徒が自ら設定した課題に取り組むことで主体的な学びの姿が現れ、協同して学習を進めることで生徒同士・生徒と先生や地域の方との対話的な学びが広がってきました。

新しい教育課程では、将来よりよい社会の担い手となる生徒自身が、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるのか」を自ら意識し実現できるよう学習を創造していくことが求められています。

本年度は、この新しい教育課程に向かって、これまでの研究を一步進め、学びを人生や社会に生かそうとする態度を育み、生徒自ら「学びに向かう力」を涵養するため、生徒一人ひとりが「キャリア・パスポート」を作成してみようと考えました。

例えば、「意見の相違を認め合いながら話し合い、歩み寄ることができた」（道徳など）、「教科の学習内容をまるで自分たちが新しく作り上げたように思えた」（数学など）、等の学習キャリアを蓄積し、そこから自分の学びを俯瞰し、今後どのように学び、生きようとするのか考える契機としたいと考えました。

本校では、パナソニック教育財団助成と町予算によりこれまで大型テレビ（電子黒板を含む）7台（いずれもキャスター付きラックにより移動可能）、プロジェクター3台、タブレット40台を整備してきました。サーバー内に蓄積した自分の「キャリア・パスポート」へのアクセスを教室内の無線LAN経由でタブレット端末から行ったり、その提示や共有を大型テレビやプロジェクター等で行ったりすることが、すべての教室から可能です。

毎時間の学習を自らの「キャリア・パスポート」に蓄積し、友だちの「キャリア・パスポート」も参考にしながら、自分のキャリア形成を見通す力へとつなげるため、必要な支援の在り方を生徒とともに実践の中で模索したいと考えます。

## 2. 研究の目的

本研究では、教科等で主体的な学習を展開しつつ、中学校3年間を通じて、変化の激しい今日の社会に必要なとされる態度やスキルや学習を通して得られた感動などを、生徒一人ひとりが自分の「キャリア・パスポート」に記録しながら、自分の学びが今どのような状況にあり、今後どのように進もうとするのか自ら判断できるよう支援を行うことを目的として研究に取り組みます。

## 3. 研究の経過

研究職員会を開催し、各教科・領域担当で、今年度の実践を見通して、教科で想定する「キャリア」の例を考察し、中心として取り組む単元を想定しました。その中で、タブレットや大型テレビなどのICT機器の活用方法についても想定を行いました。

その中で、

- ①キャスターで移動可能な大型テレビでも、毎時間の移動・設置には時間と手間がかかり、できるだけ移動は避けたいこと
- ②生徒の主体的な学習を促すためには、できるだけ多くの資料・教材・生徒の学習成果等も常備したいこと
- ③タブレット端末と無線LANの安定的な接続と大型テレビへの出力には、LAN関係機器の常設が望ましいこと

などが要望として出されたため、できるだけ教科専用教室を設けて学習環境を整えることとしました。

生徒数の減少に伴い空き教室も増えていたことから、英語科専用教室を3つ（各学年で使用）、社会科教室を1つ（3年生と2年生が使用）、国語科教室を1つ（2年生と1年生が使用）、その他従来通り理科室2つ（全学年使用）、音楽室、美術室、体育館、技術室、家庭科室（被服室と調理室）が学習用の教室として準備でき、普通教室で学習するのは、数学科と3年生国語科、1年生社会科のみとなりました。

今年度の財団からの助成で、国語科教室と音楽室に大型テレビが設置でき、タブレット端末や無線LANとの常時接続も可能になりました。美術室と被服室はプロジェクターを利用することとし、体育館は実践に必要な単元のときに大型テレビをキャスターで移動して利用することにしました。

毎学期、校内授業研究会を目標に取り組みを進め、授業研究会の授業者だけでなく、その前後に自主的に授業提供も行いながら、研究を進めるようにしました。

6月には校区内の小学校の先生方を招いた授業研究会、9月には県中部地区の中学校・高等学校の数学科の先生方に公開する研究授業、11月・2月にも校内授業研究会を実施して、研究・実践を進めました。その他にも、それぞれの教科で単元や題材などを設定しながら研究に取り組みました。

## 4. 代表的な実践

【1年生：道徳】友情、信頼 B-(8)

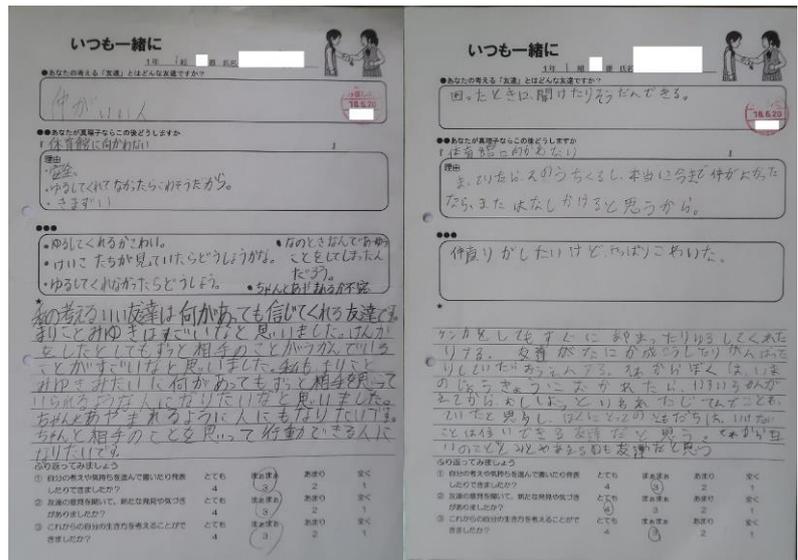
「いつも一緒に」を題材として、「友達とは何か」と改めて考えることにより、お互いを認め合うことの大切さを考え、親しい友人関係とただ楽しい時間を共有するだけでなく、お互いに励まし合い言いづらいことでも伝えたり忠告し合ったりすることが大切であることに気付くことができるよう学習



を進めました。

学習の記録では、道徳の時間に活用するワークシートを工夫し、「ふり返ってみましょう」コーナーを常設することなど、できる限りフォーマットを統一するようにして、それぞれの時間に自分が感じたことを蓄積していけるようにしました。

併せて、それをできる限り画像で蓄積することとして、生徒がこれまでに自分感じたことや考えたことを



すぐに振り返ったり、教師が来年度から始まる「特別の教科 道徳」の評価に活かしたりできるよう工夫しました。

生徒は、漠然と考えていた「友達」について、やや困難を伴う場面での自分の取るべき言動を具体的に考えることを通して、より深く友達のことを見つめられるようになり、ワークシートには一人ひとりの変容がしっかりと残りました。

授業後の研究会では、

- ・一人ひとりの変容を今後も継続して蓄積しようとする工夫は、生徒が自分の歩みを自省するためにも、教師が生徒の変容を見取って適切な評価に活かす観点からも大切である
- ・「ふり返ってみましょう」コーナーは、できれば数値化して教師が把握することで、題材・資料が適切であったか判断したり、教師が自身の指導の在り方を振り返る際に活かしたりできるのではないだろうかなどの指摘をいただきました。

### 【3年生：社会科】地域社会と私たち

私たちの町、北栄町の町長さんをお招きして、生徒対象の意識調査の結果や町の広報誌・ホームページ等から収集した資料、実際に町内をめぐって足で集めてきた情報をもとに、自分たちがふるさと北栄町に対して抱いているイメージや、「住みたい理由」、「住みたくない理由」、北栄町活性化のための提案などをプレゼンにまとめ、報告会を開きました。

生徒たちは、相互に行う意識調査の質問項目の検討からスタートし、様々なメディアの中から自分が設定したテーマに沿って資料を収集し、プレゼン資料を練り上げ、報告を行いました。

今回の取り組みでは、生徒一人ひとりの課題意識から成果物としてのプレゼンデータまで一連の蓄積がデジタルデータとして蓄積でき、生徒は自分がどのような視点から取り組みを始め、どのように資料を収集し、どのように考察して、何を町長さんに提案しようとしたのか、すべてデジタルで振り返ることができました。



また、時間の関係で町長さんに直接プレゼンできたのは全員ではありませんでしたが、プレ大会を持つことで、全員が相互に自分のプレゼンを伝え合うことができました。

そのことで、データの相互活用も活発化し、データを引用する場合の注意点なども指導することができました。

町長さんから、一つひとつの提案に対して、ていねいな評価と町の現状・施策についての説明をいただき、生徒は自分たちの町を見直す良い機会となりました。

事後の検討会では、「将来北栄町に住みたいか」というアンケートに対して、本実践に取り組む前後で生徒の意識がどのように変わったかみてみると、この実践の意義がより明確になったり、町民の一人としての自覚が深まったりするのではないかと指摘いただきました。



### 【1年生：数学科】方程式

小学校で学習した□や文字を用いた式、1学期に学習した文字式の計算を基礎として、未知数を含む文字式からその値を求めたり、それを日常の問題の解決に活かしたりしようとする単元です。

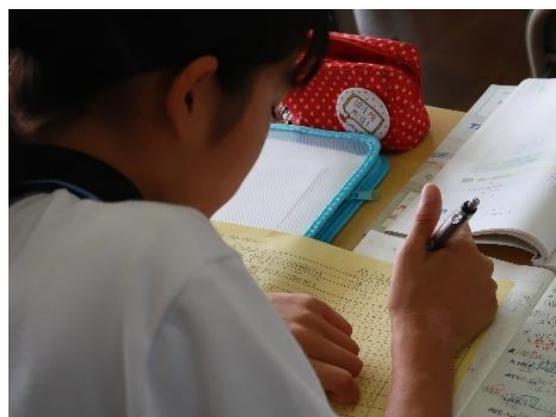
問題文に即して等式をかけること、文字式を読み取ることができること、文字式を形式的に処理して解を求められること、得られた解を問題に即して吟味できることなど、方程式をもとに、文字式の様々な側面や利点に気づけるよう学習を進めたいと考えました。

学習を進める上で、毎時間到達目標を「行動のこぼば」（「括弧のある方程式を正しく括弧を外して解くことができる」など）で定め、その目標に対して自分ほどの程度到達できたのか自己評価してそのデータを蓄積していきました。

併せて、それをデジタル化して蓄積することで、生徒一人ひとりの学習履歴を教師がすぐに参照したり、それに応じて必要な振り返りの時間を持ったりするようにしました。

それまでの学習で正の数・負の数や文字式の計算を苦手にしてきた生徒も、自分の学習としっかり向き合うことで、苦手なところが明確になったり、次時の学習で振り返りをするめあてを持ったりすることができ、少しずつ自信を深められたようです。

実践の一端を鳥取県中部地区中学校・高等学校合同数学教育研究会で公開し、参加された先生方から、「一人ひとりの学習履歴の見取りは指導を進めていくうえで大切である」、「デジタル化しているが、その時間や手間をもっと省いた方が、指導に力が注げるのではないか」などのご指導・ご批判をいただくことができました。



### 【1年生：美術科】消しゴムハンコを作ろう

毎時間、テーマに沿って生徒が一人一つずつ消しゴムハンコを作り、自分の作品と友だちの作品とを集積して一枚の大きなつながりのある作品を仕上げようとする単元です。

学習の成果として、1時間ごとに作品のハンコとそれによるスタンプ帳ができますが、それを各自タブレットで保存して、デジタル作品集を積み上げていきました。

矢印や水道管など接続を前提としたハンコからスタートして、動物や文房具など一見すると何の関連もなさそうなものを多数押印した作品へと難度が上がるにつれて、様々な表現の工夫が見られるようになりました。

生徒の感想にも「〇〇さんと白黒が逆のハンコができて、お互いに交換して押したので、面白い作品になりました」など、当初のねらいに沿った展開となりました。

事後の研究職員会では、「作品が積みあがることで自分の表現が広がっていることが分かりやすい」、「ハンコを一つずつ押してパラパラアニメ風の動画を作成させたら、一つずつ押していくことの効果が見えやすいのではないか」などの指摘がありました。



## 5. 研究の成果

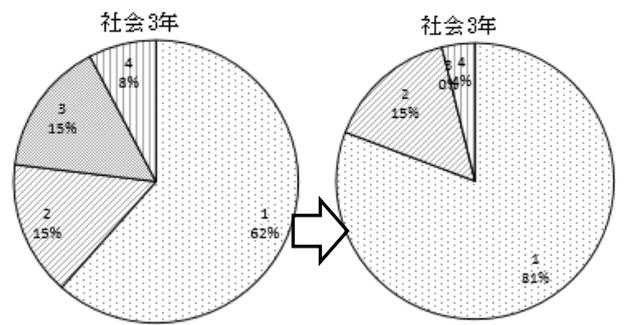
今回、本テーマに沿って研究に取り組んだ多くの教科で、

- ・自分の学びの振り返りがしやすく、学習の成果を実感するのに役立っている。
- ・生自分の不十分な点に気づき、やり直しに取り組むきっかけになる。
- ・教師にとっても、指導に対する生徒の客観的な評価（感想）が得やすい。

などの声が生徒・教師から聞かれました。

また、本校で取り組んでいる「授業評価アンケート」でも、例えば、3年生の社会科では、下の【図1：1学期】、【図2：2学期】のように「分かりやすい」という「1」の割合が伸びる成果も見られました。

もちろんこれは、本研究の成果のみによるものとは言えませんが、1年数学でも「1」評価が1学期82%→2学期90%になるなど、一定の成果は現れているのではないかと考えています。



【図1：1学期】

【図2：2学期】

## 6. 今後の課題・展望

反面、今回の取り組みに対して、教師の側から、

- ・デジタル化することに時間が一定程度かかり、もう少し省力化できないか。
- ・教科専用教室があればタブレットや無線LANを設定したままでよいので取り組みやすいが、普通教室で行うには手間が大きい。

- ・「キャリア・パスポート」の意味合いが十分吟味できておらず、これまでの振り返りプリントをデジタル化しただけのように思える。
- ・教科ごとに特性が異なるため、教科や単元で取り組みがまちまちになり、全体として統一した取り組みになりにくかった。

などの指摘もありました。

今回の取り組みでは、「キャリア・パスポート」に「生徒の学びを蓄積」していくことを進めてきましたが、様々な教科・領域で取り組む中で、進め方を教科・領域ごとに決定してもらうこととしたため、教科ごとに取り組みにばらつきが生じ、「キャリア・パスポート」が全体としての統一性を持ちにくい面がありました。

また、その関係で、「キャリア・パスポート」を活用した成果をどのように評価するのか、指標や方法が明確にできなかった面も残りました。

本研究では構想段階から、生徒のキャリアと並行して「教員のキャリア」についても考えるべきではないのか、という提案もありました。「教員のキャリア」に視点を置くことで取り組みの成果の評価方法がかなり統一できるのではないかという反省が、研究職員会でも提起され、次年度以降の取り組みの目標となりました

## 7. おわりに

今回、パナソニック教育財団の助成をいただき研究を進める中で、教科専用教室で恒常的に、タブレット、無線 LAN、大型モニターを活用する環境を整えて行う学習活動の「進めやすさ」に多くの先生方から賛同が得られました。反対に物理的に教科専用教室が配当できなかった先生からは、「移動式大型モニターだけでもあれば、生徒の学びの蓄積が進むのに」との声がありました。

いつも、同じ学びの環境が整えられ、学びの蓄積が教室に「見える化」された中で行う学習に私たちは手ごたえを感じています。本校は近年の少子化の中でも今後数年はほぼ同じ学級数で推移します。

教科専用教室での学びの蓄積、生徒一人ひとりの「キャリア・パスポート」による学びの振り返り、そして、「教師のキャリアパスポート」による教師の指導力向上を柱としながら、次年度以降の研究を一層進めていきたいと考えています。